

マタイによる福音書20章 「仕える者に」

1A 後の者が先に 1-16

1B いつまでも探す主人 1-7

2B 主人の気前の良さ 8-16

2A 贖いの道 17-28

1B 悟らない弟子たち 17-23

2B 皆のしもべ 24-28

3A 後に呼ばれた弟子 29-34

本文

マタイによる福音書 20 章を開いてください。20 章は 19 章からの話の続きです。私たちは、19 章にて子供のような小さき者にならなければ、天の御国に入れられないということ、またそのような小さき者をイエス様の名によって受け入れることは、イエス様ご自身を受け入れるのだということ 18 章の言葉が、とても大切な言葉になることを学びました。けれども、弟子たちの中には、その小さき者に届くというイエス様の言葉ではなく、自分が偉大になるという野心の方が強かったのです。

1A 後の者が先に 1-16

その態度が、ペテロの言葉にも表れていました。金持ちの青年がイエス様から離れて、それでイエス様は、金持ちが神の国に入るのは難しく、人にはできないが神にはそうではない、と言われた時に、「ご覧ください。私たちはすべてを捨てて、あなたに従って来ました。それで、私たちは何をいただけるのでしょうか。(マタイ 19:27)」と尋ねたのです。自分たちは何もかも捨てて従ったのだ、だからどんな報酬を受け取るのか？と、大胆に尋ねたのです。イエス様は、確かに彼らには報いがあることを認められました。イスラエル十二部族をそれぞれが治め、また、この世においても捨ててものの百倍の報いを受け、永遠のいのちを受け継ぐと約束されましたが、注意を与えました。「19:30 しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」このことを理解してもらうために、イエス様は、新たに天の御国のたとえをされます。

1B いつまでも探す主人 1-7

1 天の御国は、自分のぶどう園で働く者を雇うために朝早く出かけた、家の主人のようなものです。2 彼は労働者たちと一日一デナリの約束をすると、彼らをぶどう園に送った。3 彼はまた、九時ごろ出て行き、別の人たちが市場で何もしないで立っているのを見た。4 そこで、その人たちに言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。相当の賃金を払うから。』5 彼らは出かけて行った。主人はまた十二時ごろと三時ごろにも出て行って同じようにした。

イエス様は、いつも彼らが見ている風景を譬えにしておられます。収穫の時期には多くの労働者が必要になります。短期間に収穫を行う必要があるからです。そして、日雇い労働者を主人が探します。始まるのは、午前 6 時です。6 時から作業が始まり、午後 6 時に終わる、途中、休みがありますが 12 時間労働でした。日雇い労働者は、小作農で自分の畑での作業がすぐに終わるような人、また畑を無くして職を転々としているような人たちです。そして、この話で特徴的なのは、主人が何度となく、市場に何もしないで立っている人たちを探しに行っていることです。3 時間おきに行っています。9 時頃行き、正午にも行きました。それから 3 時にも行っています。

そして、気を付けなければいけない点が一つあります。朝 6 時から働く人たちには、「一日一デナリの約束をする」と言っています。けれども、その後の労働者には「相当の賃金を払うから。」としか言っていないのです。そこでいくら払うかについては、主人は約束をしないで、自分のぶどう園に寄せ集めているのです。

6 また、五時ごろ出て行き、別の人たちが立っているのを見つけた。そこで、彼らに言った。『なぜ一日中何もしないでここに立っているのですか。』7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』主人は言った。『あなたがたもぶどう園に行きなさい。』

3 時頃に、最後に男たちを労働に連れて来たのですが、その 3 時間後ですと 6 時になってしまいます。日没で畑も見ることができません。ですから、一時間早めて 5 時に行っています。ところが、その時に、「一日中何もしないでここに立っている」人たちがいたということです。そしてたった一時間だけの労働だけれども、主人はぶどう園に行きなさいと誘っています。

2B 主人の気前の良さ 8-16

8 夕方になったので、ぶどう園の主人は監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから始めて、最初に来た者たちにまで賃金を払ってやりなさい。』9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつ受け取った。10 最初の者たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らが受け取ったのも一デナリずつであった。11 彼らはそれを受け取ると、主人に不満をもらした。12 『最後に来たこの者たちが働いたのは、一時間だけです。それなのにあなたは、一日の労苦と焼けるような暑さを辛抱した私たちと、同じように扱いました。』

この話は、神の恵みと私たち人間の論理の行き違いを、如実に表しているような内容です。主人がなぜ、五時からの男たちから賃金を払ったのでしょうか？しかも、一デナリということで午前 6 時から働いている者たちと同じ手当なのです。そこには、主人自身の言葉に出てきますが、彼が「一日中何もしないでここに立っている」ということに対して、深い憐れみを抱いたからです。本当は雇われたいと願っていたのに、働く機会が与えられずに迷っていたということでもあります。ですから、そのような人々にも同じように一日働いたものとして、賃金を支払いたいと願ったのです。その憐

れみがあります。そして、その憐れみにしたがって遅い時刻に雇われた者たちから一デナリずつ払って、そして契約した通りの一デナリを、午前 6 時から働いた者たちにも支払いました。

イエス様は、似たような譬えを放蕩息子の時にも行われましたね。生前に財産の分与を要求し、遠く離れた国に行って放蕩の限りを尽くした弟息子が、家に戻って来たら彼を息子として父が受け入れ、盛大な祝宴を設けました。ここの午前 6 時からの労働者と同じように、兄息子も畑仕事で汗水流したのに、弟のようにお祝いしてもらえなかったではないか？と怒り、不満を鳴らしました。ここに、神の恵みの原理が働いています。主は、人間の考えるような報酬の原理で動いておられるではありません。神がアブラハムを義と認められたことについて、パウロがこう言っています。「働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。(ローマ 4:4-5)」兄息子に父が話しましたが、それと同じように主人はこの午前 6 時からの労働者にも話しかけます。

13 しかし、主人はその一人に答えた。『友よ、私はあなたに不当なことはしていません。あなたは私と、一デナリで同意したではありませんか。14 あなたの分を取って帰りなさい。私はこの最後の人にも、あなたと同じだけ与えたいのです。15 自分のもので自分のしたいことをしてはいけませんか。それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんでいるのですか。』

主人は、「友よ」と呼んでいます。これはまさに、イエス様ご自身がここにいる弟子たちに語っておられる、呼びかけであります。信頼をしているからこそ、愛しているからこそ、主人は朝から働いていた労働者に対して賃金をあとに渡しました。

ここで第一に知らなければいけないことは、「私はあなたに不当なことはしていません。」ということです。主が、あたかも不当なことをしているように感じる場合があります。ここで労働者が感じているのと同じように、感じてしまう場合があります。「私はこれだけのことを労してやってきたのに、なぜ主よ、あなたはそれにふさわしい報いを下さらないのですか。」という思いです。このように不公平に感じるのです。けれども、神の公平さ、その正しさについて疑ってはいけません。黙示録で、天にいる群衆が、「あなたは、正しく真実な方です」と叫び、大歓声を挙げている場面がありますが、今は分からなくとも、主は必ず正しく判断しておられるのです。

第二に知らなければいけないのは、「一デナリで同意したではありませんか。」というところです。主が、約束されたことを思う時に、私たちはいつの間にか、「私がこれだけやったのだから、それ相当の報いが必要だ」と思って、神の約束にはないところまで求めようとしている場合があります。当然の権利だと持ってしまうのですね。

そして第三に、「あなたの分を取って帰りなさい。」と言われました。そうです、それぞれが受け取る分があります。他の人がどうなのか？という比較はないのです。走るべき行程は、自分の走るべき行程であり、他の人のものではないのです。私が違和感を抱く天の御国の姿は、何かいかにも階級があるような表現をすることです。この人には数多くの報いがあり、あの人には少ないというような話です。もちろん、イエス様ご自身が御国で偉大な者、また小さな者という比較をされていますから、天の中にそういったものはあるでしょう。けれども、比較はありません。ペテロが、ヨハネのことについてイエス様に、「主よ、この人はどうなのですか」と尋ねたら、イエス様は、「わたしが来るときまで彼が生きるように、わたしが望んだとしても、あなたに何の関わりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。(ヨハネ 21:21,22)」

そして第四に、「あなたと同じだけ与えたいのです」という言葉です。これは、先に話したように神の憐れみと恵みの原理が働いているからです。ダビデが、分け前を等しく与えた時のことを思い出します。ツェケラグの町をアマレク人に襲われて、追いかけていったのですが 600 人のうち、200 人が疲れ切って、途中で荷物番をしていました。400 人で追撃をして、妻や子供が無害でなかったばかりか、自分たちの財産のほとんどを取り戻し、それ以上の戦勝品がありました。それで、「彼らは一緒に行かなかったのだから、われわれが取り戻した分捕り物は、分けてやるわけにはいかない。」と言った者がいたのですが、ダビデは、「兄弟たちよ。主が私たちに下さった物を、そのようにしてはならない。主が私たちを守り、私たちを襲った略奪隊を私たちの手に渡されたのだ。」ということで、同じく分け与えたのです。(1サム 30:22,23) 大いなる恵みがあって、なぜ独り占めするのか？それとも、私たちが敵に勝利したのは我々のおかげだとでもいうのか？ということでもあります。そう、主のために働いていく時に、自分自身がやったと考えること自体が間違っています。それさえも神の恵みなのです。

そして最後、第五に、「それとも、私が気前がいいので、あなたはねたんしているのですか。」と主人は言っています。主の恵みは、人を妬ませます。恵みというのは、受けるに値しない人が受ける祝福だからです。そして、これこそが弟子たちが互いの中に起こっていた競争心であったのです。

16 このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」

これをイエス様は言われるために、譬えを話されたのですが、弟子たちは、これから先頭に立って教会を導いていくこととなります。そして彼らから何千人、何万人、そしてもちろん彼らの死後でも、その教えた言葉が新約聖書にあり、何千万、何億人という信者が与えられていくこととなります。彼らは、仕える人にならなければならなかったのです。もし、自分たちに働きによって人間的に報酬が与えられるのであれば、彼らこそが霊的な最も高い位にいて君臨することになり、遅く信じた人々は下の階級というようになりますが、神はすべての者たちを兄弟とみなしておられます。なぜなら、全ての人が罪を犯して、栄誉を受けられないのに、それでも愛して、義と認めてくださった

のです。その恵みによって、神の働きに関わるようにして下さったのですから、先に救われ、先に働きをしている者も、しもべの姿をとって後から来る人々を共に喜び、祝福すべきなのです。

世界の宣教を歴史的に見ても、地理的に見ても同じことが言えます。何百年かけても種を蒔いて実が結ばれなかったアフリカ大陸があります。しかし、第二次大戦後、それらの国々が独立してから、プロテスタント史の中で最も急速な信者の増加を見えています。神が終わりの日において、大いなる恵みによって、ちょうど五時まで立っていて、働くことができなかった男たちのように、多くの人々を救い、また霊的成長も早めてくださっています。その勢いは神の恵みの業、五時まで雇われなかった男たちを憐れむ主人と同じような思いで、何とかして魂を救いたいと願われている情熱によるものなのです。

2A 贖いの道 17-28

1B 悟らない弟子たち 17-23

17 さて、イエスはエルサレムに上る途中、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。18 「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、19 異邦人に引き渡します。嘲り、むちで打ち、十字架につけるためです。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

今、エルサレムに向って旅をしていることを思い出してください、19章で「ヨルダンの川向こうを経てユダヤ地方へ入られた」とあります。まだ、ユダヤ地方に入っていないので、エリコに行く場面が次に出てきますので。けれども、エルサレムに上る途中ということで、イエス様ははっきりと、これまででない詳細な描写で、ご自分がこれから向かう受難の道を明らかにされます。第一に、エルサレムに入城されることです。第二に、その宗教指導者、神殿を司る祭司長や、律法を守る律法学者らに引き渡されます。大祭司カヤパ邸に行き、そこで死刑宣告を受けます。けれども、彼らには正式に死刑を執行する権限がありません。それで第三に、異邦人に引き渡されます。ローマ総督の前で、あざけりを受け、鞭で打たれ、そして十字架に付けられるのです。しかし第四に、三日目に甦られます。

イエス様は、永遠の昔から父のふところにおられた方は、ご自分が世に来られた目的を知っておられました。そして、これらの細かいことを、聖書の預言から語っておられました。詩篇 22 篇、イザヤ書 50 章 6 節、イザヤ書 52 章 13 節から 53 章の最後まで、キリストの受難があり、そして詩篇 2 篇など、甦りの預言もあります。そして宗教的、政治的状況をイエス様は知っておられました。ユダヤ当局から宗教的な断罪を受けること、そしてローマも苛酷な拷問をご自分に課されること、つまり危険な領域に入ることをよく知っておられました。それで、前もってイエス様は弟子たちにも、用意するように警告されたのです。ところが、です。

20 そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、息子たちと一緒にイエスのところに来てひれ伏し、何かを願おうとした。21 イエスが彼女に「何を願うのですか」と言われると、彼女は言った。「私のこの二人の息子があなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるように、おことばを下さい。」

これは、とても面白い展開になっています。弟子たちの心が、イエス様の心とまるで違うところにあることに気づきます。先に、イエス様が十二弟子に、イスラエルの十二部族を治めるように約束されました。それで、今、なんと母の力を借りてイエス様に影響力を持たせようとしているのです。イエス様はだから、五時からの労働者の譬えによって、先の者が後になるということを語られたのに、そしてたった今、十字架への道を歩まれることを話されているのに、自分たちがいかに偉大になるか、先頭に立つかという話になっています。

ところで、「ゼベダイの息子たちの母」ですが、ゼベダイの息子はヨハネとヤコブです。ペテロと共に、高い山に上がり、その前はヤイロの娘が生き返るのを目撃しました。自分たちが、その高い地位に着くに値すると思ったのでしょうか。いった通りです、主の恵みによって近づいているだけなのに、それを自分たちがこれだけのことをしたと思いがっているのです。

そして、母ですが、他の福音書を総合すると、おそらくは十字架刑の現場にいたサロメではないか？と思われる。ヨハネの福音書を重ねると、もしかしたらイエス様の母マリアの姉妹という可能性さえあります(ヨハネ 19:25)。ということは、ヨハネとヤコブはイエス様の従兄弟ということになりますが、縁故主義もあつたのでしょうか。そういう人たちもいますが、はっきりしているのは母も、十字架刑のそばで見つめているほど、イエス様の弟子の一人であり、イエス様を愛している人であつたということです。イエス様の近い人たちが、こうもイエス様の心と思ひから離れてしまっているほど、心が鈍くなっているのだということを思いますと、私たちも本当に神の恵みによって、引き寄せられているだけの小さな存在なのだということを思います。

22 イエスは答えられた。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲むことになります。しかし、わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」

ここのやり取りも、あまりにも頓珍漢になっています。「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。」とイエス様が言われていますが、これはあなたがたが、あまりにも世的になっていて、天の御国がどうなっているのかを分かっていない、ということです。神の国を世の価値観で眺めています。「わたしが飲もうとしている杯」とありますが、これはまさにイエス様が十字架において、神の怒りを受けられる杯のことです。彼らにとっては苦しみの杯のことです。彼らは、

「できます」と答えています。王位に着いたイエス様が飲む祝宴の時の杯のことを話しているとも思っているでしょう。けれども、たまたま彼らの答えは正しかったのです。「あなたがたはわたしの杯を飲むこととなります。」と言われます、これは、ヤコブはヘロデ・アグリッパ一世によって殉教することとなりますし(使徒 12:2)、ヨハネは黙示録 1 章にあるように、パトモス島で流刑になります。

ところが、元々分かっていないのは、イエス様はご自分の父の権威の中で動いているということです。イエス様は神の御子であられ、神ご自身であられます。けれども、父なる神の権威の下におられ、御子として、つまり君子としてその座にお着きになるのです。あくまでも決めるのは、父なる神であられます。イエス様は他のところでも、父なる神しかできないことを話しておられましたね、主が戻られるのは、いつ何時であるかは、父なる神が定めておられるということです。ですから、再臨の時期を定めてはいけないように、私たちは誰が天においてどの位にいるのかどうかとか、父なる神のお定めになっていることを議論することは、おこがましいことなのです。

2B 皆のしもべ 24-28

24 ほかの十人はこれを聞いて、この二人の兄弟に腹を立てた。25 そこで、イエスは彼ら呼び寄せた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。26 あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。27 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」

午前礼拝に、この箇所から話させていただきました。彼らの心がかなり乱れています。ヨハネとヤコブが、これほどまでに世的な動きをするとは衝撃的です。そして彼らの受け答えも酷いものでした、「できます」と答えていますね。そんな簡単に答えてほしくありません。そして、こうして他の弟子たちが腹を立てて、仲間の中に不一致が生まれました。そこで、イエス様が彼ら呼び寄せるのです。ここに霊的復興、リバイバルがあります。いろいろなことが起こって、混乱している時に、解決が見つからない時に、唯一の道は、イエス様の前に一人一人が来ることです。そして、イエス様の言葉を聞き、悔い改めることです。

ここでの悔い改めは、斬新的、いや急進的なものです。ただでさえ、イエス様の位の横に着きたいと思っていたのに、偉くなりたいならしもべに、先頭に立ちたいなら奴隷になりなさいと言われたのです。ここから、イエス様の道がしもべの道であることが分かります。イエス様は、弟子たちに対する報い、栄光をお見せになりました。イスラエルの十二部族を治める地位に彼らは着きます。しかし、その栄光は苦しみによって与えられるものなのです。イエス様が十字架の死に至るまで忠

実になられて、ご自分を低くされましたが、それゆえに神が引き上げて、全ての名にまさる名を与えられるのですが、同じようにキリストに付く者はしもべの姿を取り、それゆえに世が改まる時に栄光の座にキリストによって着くのです。「私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。(ローマ 8:17)」

そしてイエス様は、その仕え人として生きる中で、最も大切にしているのは、「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」です。贖いの代価、私たちが捕えられた人質のようになっている、イエス様が身代金のようにしてご自分の身をお捧げになります。私たちは、無目的に苦しむのではありません。キリストの福音のゆえに、仕え人となり、しもべとなるのです。何か他のことについて、自分が奴隷状態のようにされているのでは意味がありません。飽くまでも、キリストに従うがゆえに、苦しみを受けているのなら、それは御心に適ったことです。

3A 後に呼ばれた弟子 29-34

29 さて、一行がエリコを出て行くと、大勢の群衆がイエスについて行った。

一行はついに、ユダヤ地方の中に入っています。ペレア地方を通り、ヨルダン川を渡って、それでエリコに入りました。ここからエルサレムまでは、急な上り坂を上がっていきますが、徒歩ですと一日の道のりです。エリコは、いろいろな意味で分岐点であり、出発点であります。ヨシュアたちが約束の地に入り、初めに攻略したのはエリコです。そして、エリヤからエリシャに預言者の務めが引き継がれた時に、二人はヨルダン川の向こう岸に渡りました。そこでエリヤが引き上げられましたが、その後エリシャは、ヨルダン川を再び渡り、エリコに戻っています。そして、バプテスマのヨハネは、この辺り、ユダの荒野において神の言葉を宣べ伝え始めました。このように、神の働きの始まりがエリコからあったのですが、イエス様は十字架への道、それから甦り、そして最後には天に昇られるという大きな働きの中に入られます。

ここで、「一行がエリコを出て行くと」とありますが、ルカは「エリコに近づいた」と書いています。これは矛盾していません。遺跡が発掘されて、二つのエリコがあったことが知られています。手前に、旧約時代のエリコがあります。ヨシュアたちが倒した、あのエリコの跡です。そして、南に 2 キロほど歩くと、ヘロデが冬の宮殿として使っていた新約時代のエリコがあります。マタイは、旧約時代からのエリコをイエス様の一行が出て行かれていることを話し、そしてルカは新約時代のエリコに入っているという話をしています。そして、「大勢の群衆がイエスについて行った」とあります。ペレア地方で多くの人に癒しを行われていましたが、その群衆たちが混じっているのでしょう。

30 すると見よ。道端に座っていた目の見えない二人の人が、イエスが通られると聞いて、「主よ、ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫んだ。31 群衆は彼らを黙らせようとたしなめたが、彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫んだ。

二人の盲人がいます。一人は、マルコ伝によるとバルテマイという人でした。彼らは物乞いをしてきたことが、そこに書かれています。盲人は、仕事をするができなかったので、このように物乞いに頼らざるを得ない状況でした。それゆえ、見下されていました。ここで、群衆が「彼らを黙らせようとたしなめた」とあります。彼らが、エルサレムで王としてイエス様をたたえるのですが、まさに王とその一行が歩いているのに、どうしてお前がイエス様を煩わせようとするのか？ということです。これは 19 章で、子供がイエス様のところに来るのを弟子たちが叱ったのと同じ発想です。

しかし、盲人たちは明確に、イエスがメシアであることを認め、叫んでいます。「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」ダビデの子と呼び、彼が約束のメシアであることを認めています。そして主と言っていますから、彼によって救われたいという願い、個人的にこの方を信じて、従いたいという願いを言い表しています。

ここで、彼らが群衆に邪魔されながらも、この機会を逃したら二度と、その機会がやって来ないかもしれないと思って、それで叫んだのでしょう。あまりにも多くの方が、イエス様に大声を挙げない。挙げて一度だけで、それ以上、声を挙げないのではないのでしょうか？長血を患う女もそうでした、人が押し合いへし合いしても、どんどんその中に入り、イエス様に触れました。それだけ必死なのですね、これを「活着ている信仰」「信仰を働かせる」と言ったらよいでしょう。

32 イエスは立ち止まり、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」33 彼らは言った。「主よ、目を開けていただきたいのです。」34 イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた。すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

イエス様が教えられていたこと、すなわち「このような小さき者を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる」ということを実践しておられます。イエス様は群衆が追い払おうとしているのに、自ら彼らと呼ばれました。そして、イエス様はエルサレムで死ななければならないという、重大なことを心に抱えておられるのに、最後の最後までこの姿勢を崩しませんでした。これを学びたいです。

そして、イエス様の語りかけ方は、私たちは学ぶべきです、「わたしに何をしてほしいのですか。」であります。ご自分のことについて、どれほどのことを信じているのか？と問われています。多くの場合、こちらが必要な情報を全て伝えなければいけないという伝道を、私たちはします。けれども、聞いている人がどれほど、神への信仰、イエス様への信仰を持っているのか、どのように聞いているのか尋ねることが少ないです。けれども、イエス様はしばしば、ご自身への信仰を押し付けるのではなく、相手の信仰を引き出そうとされます。そして、彼らははっきりしていました。「主よ、目を開けていただきたいのです。」

そして、イエス様が良いことを行われる時のいつもの動機が書かれています。「深くあわれん」なのです。イエス様は、この動機付けをいつ何時も忘れませんでした。ご自身が忙しい時も、疲れている時も、群衆を見れば、深くあわれまれました。弟子たちが他のことを考えている時も、イエス様はこの心から離れたたり、ぶれることはありませんでした。

最後に、ここが 20 章のまとめです。「すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。」とあります。この盲人たちが、まさに、「後の者が先になり、先の者が後になります。」という御言葉の実現です。エルサレムに行けば、すぐにイエス様は十字架に付けられます。けれども、遅すぎることはないのです。そのわずかな間でも、彼らはイエス様を主としてついて行く決断をしたのです。そして、その恵みははかりしれないものなのです。このように、主の心、神の心はここにあったのです。このように、いつまでも立っていて誰か雇ってくれる人はいないか待っていた男たちと同じように、この盲人たちも待っていたのです。

こう言った人々のために、使徒たちは主に仕えているのです。自分がどうなのか、偉くなれるのか？ということなんか考えている暇がないです。そう、暇がない、というのが謙遜の現れなのです。